

「教科書が伝える戦争」を軸に次世代への継承

吉岡 数子

【はじめに】《教科書が語る20世紀展》

21世紀最初の私の出前展示・出前講話は、2001年1月13日から2月25日まで広島で開催された“墨塗りの行間に子どもたちの叫びが聞こえる”《教科書が語る20世紀巡回展》だった。折しも、2000年12月8日付け朝日新聞に「戦争知らぬ若者たちへ教科書集め15年間……8日は資料館でパネル作り」と紹介された「教科書の歩み」「戦時下の教科書」「教科書が語る日の丸・君が代の歴史」「アジアの教科書」パネル4セットを出前展示、延べ20日間に2500人を超える入場者があった。期間中可能な限り広島を往復して“戦争の世紀といわれた20世紀の教訓を次世代に引き継いでいこう”という思いを「戦争のない21世紀を子どもたちに」のタイトルの講演や展示会場での講話を通して伝える営みを続けた。



三次市平和人権センター講演会

その後「新しい歴史教科書をつくる会」（以下「つくる会」）編集の教科書が検定合格した。「大東亜戦争史観」「教育勅語賛美」の教科書が学校現場に持ち込まれようとしている、まさに第二の墨塗り、新しい「少国民」を作るための準備だと思った。「つくる会」教科書は、過去の侵略・加害の史実を正しく認識して、アジアの人々との真の友好関係を築くような歴史認識が教育を通して培われることを妨げるものであり、国定教科書の復刻版的なものでもある。「つくる会」教科書が採択されないように急遽「つくる会」教科書比

較検証パネルセット作製に着手した。作製途中から「出来あがった分だけでも貸してほしい」という要請もあった。

広島から始まった《教科書が語る20世紀展》は、「つくる会」教科書検証パネルや戦後の教科書の中の朝鮮・中国侵略の記述検証パネルも含め6セット単位で2年間に愛媛・東京・高知・京都・奈良・愛知・大阪・兵庫・岡山・香川11県54箇所で開催された。“国定教科書によって「少国民」に育てられた私が今伝えたいこと”をテーマにした来館講話・出前講話（持てる限りの教科書や教科書パネルを出前展示して）は、2001年度2002年度合わせて小学校・中学校・高校・大学・市民団体・行政の行事など70回を超えた。

2001年10月には当平和人権子どもセンター（教科書資料館）主催でこれまで作製した教科書パネル7セット158枚関連教科書140冊を一堂に集めて《教科書が語る20世紀展》を開催した。到底全てのパネルを観ることはできない量の展示をした意図“強制的に伝えるのではなく、自分で選び自分で判断する営みの大切さ”を次世代に伝えたいことを繰り返し提起することもできた。墨塗り教科書の復活を二度と繰り返してはいけないという熱気が確認できた2日間だった。

プロローグ《日本の教科書の歩み》第1部《教科書が語る日の丸・君が代の歴史》第2部《戦時下の教科書》第3部《戦後の教科書の中の朝鮮・中国・「少国民」》第4部《アジアの教科書》第5部《「つくる会」教科書比較検証》エピローグ《日本の教科書の中の女性差別》の展示構成は、2002年2月の第5回「東アジアの平和と人権」京都国際シンポジウム会場の立命館大学以学館で同時開催した《教科書が語る20世紀展》でも継承、立命館大学生や韓国・台湾・沖縄の若い世代へのメッセージが出せた。

【「在満少国民」の20世紀】

1、植民地朝鮮で生まれ、「在満少国民」に育てられた私

私が、退職金を使って「平和」「人権」「子ども」に

関する資料（教科書・パネル・絵本・書籍・パンフレット・ビデオなど）を総合的に展示したアジアとの共生をめざす私設資料館を作りたいと思ったのは、朝鮮・中国（東北地方「満州」）での苦い体験につき動かされたからだった。私は、父が侵略の加担者として朝鮮総督府農務課・「満州拓殖公社」と官吏の道（朝鮮や中国の人々の農地を取り上げる仕事）を歩んだため、1932年植民地朝鮮で生まれ、傀儡「満州国」で「在満少国民」に育てあげられた。

略奪に近い形で手に入れた総督府官舎は、庭に池が3つもあって幼かった私が迷子になるほど広く大きい家だった。その家に使用人として同居していたハイさんとアイさんという朝鮮人の少年・少女のことを私は忘れることができない。アイさんが私にだけ何度か呟いた「ここは私の家だった」という言葉の意味がわかったのは、戦後25年も経ってからだった。「満州」でも一緒だったアイさん・ハイさんは、私の1年の教科書「サイタ読本」を使って日本語を書く勉強をしていた。

私が入学した「満州」「新京」桜木小学校は、低・高学年用2つプールがあり、暖房・水洗トイレも完備していた。校庭には勝利の象徴としての戦車を置き、毎年その前で記念撮影をしていた。日本人専用の学校で中国の子どもの殆どは学校に行けなかったことがわかったのもずっと後のことだった。「新京」の官舎は贅の限りを尽くした純和風の新興の家、ハルビンの「満拓」の官舎もロシア式石造り2階建ての大きな家だった。

父の事故死(?)で敗戦の1年以上前に日本に引き揚げた後、父たちが奪った黒竜江省の農地に次々に開拓団が送り込まれ、殆どの人たちは「渡満」して数ヶ月で悲惨な状況に追い込まれた。棄民されたとはいえ、家族だけ無事に帰そうとした父の行為を素直に認めることはできない。10年以上も同居していたアイさんをハルビンに残したまま帰国してしまったことの重大さに気付いたのはずっと後だった。3年までの「何故日本人だけえらそうにするのだろう」という疑問は、国民学校の教科書を丸暗記させられる中で消えていった。

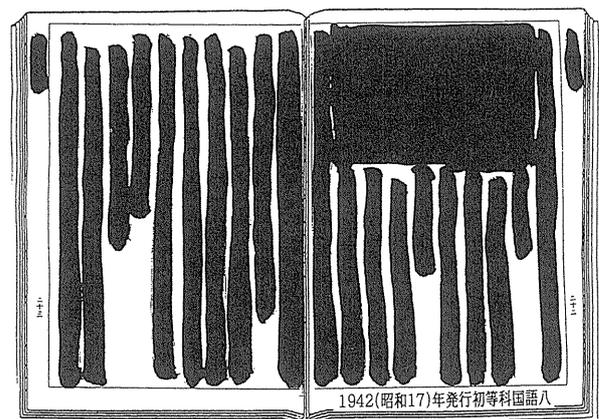
父たちが辿った侵略・植民地支配の跡を訪ねる東アジアへの旅はいつの間にか40回を超え、「戦争は最大の人権侵害」であることを各地で確認することができた。現地での調査研究・資料収集（証言・写真など）を基に加害と被害の両面から戦争の真実を伝える歴史パネル（「朝鮮侵略」「中国侵略」など）や日本の侵略・

植民地支配跡ウォッチングパネル40セットを作製、嘱託勤務していた平和と人権資料館の常設「日本の侵略と加害」のコーナーや特別展・企画展で活用するなど次の世代に伝える展示活動を続けた。

2、教科書の墨塗りと私

敗戦の後、特攻隊の基地だった学舎へ登校した女学校1年の私が最初にしたのは、「神国日本」「聖戦」「大東亜共栄圏」「八紘一宇」を信じ込まされた6年生の教科書の墨塗りだった。第5期国定教科書の中でも軍国主義・超国家主義の色彩が一段と強くなった1944年発行の教科書を「間違った所を消す」と言う教師の指示通り国史・地理・修身は全ページ、国語は25教材中18教材を「墨をするのが遅い」と叱られながら全文暗記した箇所を戸惑いながら墨を塗った。

開く時には礼をし、汚さないように、破れないように大切に使った教科書にべったりと墨を塗らされた。それまで「日本は東洋平和のためにこの戦争をしている」「だから神の国日本は負けない」と教えられた教科書が、全て間違っていたと墨で消す作業をさせられて初めて、もう竹槍で戦うことはないのだと思った。何時間も、否2日間に渡っていたかも知れない、手が痛くなるほど墨をすった記憶がある。墨塗りの実態が徐々にわかってくるなかで、GHQの命令で行われたと思っていた墨塗りが実は文部省の指示だったことがわかった時は、ショックだった。



墨塗りをしながら、植民地で生まれ育った異質の「少国民」の私は、手のひらを返すように豹変する教師への不信感が消えず「朝鮮や「満州」で子どもの目から見てもおかしいと思っていたことは、やっぱり間違っていたのだ」「国民学校の先生も女学校の先生も信じられない」と思った。同時に「満州」桜木小学校1年担任山下先生の総合学習（「サイタ読本」を家に置いて「満州補充読本」を使った）を思い出し「どんなこ

とがあっても小学校の教師になろう、今消していることが実はこうだったということが早く知りたい、教科書を丸暗記するような授業ではなく、山下先生のように教科書を使わない楽しい授業（後で総合学習だったとわかった）をしたい”と決意した。

これからは歴史の真実が学べると思ったが、その後併設中学校・高校・大学、そして大阪市での小学校勤務を通して25年余りの間「日本がアジアで何をしたのか」という加害の史実は隠蔽されたまま、教育の現場で教えられなかった。小学校に勤務してからも、隠れ総合学習のなかで被害の史実を軸にした反戦平和学習はある程度できたが、加害の史実は侵略史実調査訪中を始めるまで殆ど伝えることができなかった。

小学校6年や中学校の平和学習・総合学習に出前展示・講話して「私の墨塗り体験」を語ると、子どもたちは復刻版墨塗り教科書を見て口々に「ほんとにあったこととは思えない」「何で消さなあかんのと言わなかったんですか」「消さなあかんような教科書で教えた先生、おかしいと思わなかったのですか」と問いかけてくる。その度に新たなより巧妙な墨塗りが進められている事実をどう伝えようかと心が痛む。敗戦直後の墨塗りで、なお“先生に質問することは非国民”と思いついていた「少国民」が今できることは、とにかく「今使っている教科書、間違っていると言われたらショックやろな」と聞いてくれる子どもたちに「墨塗り少国民」の体験をそのまま語り継いでいくことだと改めて思った。

3、平和人権の思いを刻んだ隠れ総合学習

教育実習で教科の枠を外したコアカリキュラムで学ぶ子どもたちの生き生きした表情が忘れられず、総合学習を夢見て就職した1955年の教育現場は、検定強化と教科の枠にはめ込まれた学校になっていた。やむなく楽しい体育を軸にした隠れ総合学習を始めて32年間、東アジアへの平和の旅を重ねる中でいつの間にか平和人権の思いを刻んだ隠れ総合学習に移行していった。コアカリキュラムの授業が「満州」桜木小学校の山下先生・林先生の総合学習に繋がっていて、同和教育実践の自然認識・言語認識・社会認識・芸術認識なども繋がるものだったことはずっと後になってわかったことである。

夢だった総合学習・コアカリキュラムの残滓さえなく、全校時間割表があり、教科の枠がしっかりと確立されていることがわかりましたが、子どもたちの何かを待っているような顔と元気な声は救いだった。その

中で新卒の私は、初日の教室で山下先生の授業を連想させられるような臼井先生のカードを使った楽しい国語の授業に出合った。新卒1年目に体得したカード学習がその後の私の総合学習の授業の教材の核になった。それ以後、授業には必ずカード学習（種々の文字カードや絵カードを使っての学習）を取り入れた。退職後、語り部として「少国民の証言」をする時にも「五族協和」「王道楽土」「朝鮮総督府」「大東亜共栄圏」「1年のとき」「学徒動員」「教科書の墨塗り」などの短冊カードを使っている。

国語教材（カード学習）を中心にした隠れ総合学習は4年目頃から体育を軸にした総合学習に自然に発展していった。体育に着目したのは、私が「在満」国民学校時代体験した「お国のため」「立派な少国民になるため」に宮城に向かってさせられたラジオ体操、ミニ軍隊の教練としてさせられた4列横隊・4列縦隊の行進や「気をつけ」「前へならえ」「やすめ」「右むけ右」「まわれ右」「前へすすめ」の号令、爆弾にみだた紅白対抗の大玉転がしや紅白玉入れなど軍国主義教育のメインとしてたたき込まれた内容が、戦後もそのまま当たり前のように体育の学習内容として残っていたからだ。

戦中の台湾総督府発行・朝鮮総督府発行の教科書の中に「ウンドウカイ」という教材がある。日本の侵略・植民地支配によってアジアの人々とりわけ子どもたちの人権を侵害した「皇民化教育」の中核を担ったのが「運動会」「体操」だったことを物語る内容である。紅白対抗でなく6色・4色対抗の運動会、部位運動のラジオ体操でなく全身運動の体操を、号令や笛でなく音楽やチューナブルタンバリンを使った楽しい体育を軸にした総合学習を実践することで“しんどい立場の子が自己を解放していける授業づくり”“平和人権の思いを刻んだ隠れ総合学習”を続けてきた。これから教育現場が万国旗の上に日の丸を掲げて再び戦争への道を歩むことのないよう、私の体験を若い先生に継承していく手だてを考えたい。

4、「にんげん」を軸にした総合学習と平和人権学習

堺市に復職し、任命制で始まった同和教育主担を希望して獲得した私は、校内同和研修のテーマと照らして“どんなに重い障害があっても原学級でみんなと一緒に学習しよう”と集中的に権利を侵されている障害児の実態とその教育権をどう保障していくかという問題を提起しながら、原学級との交流を軸に指導を進めるために「障害児と共に歩む総合学習」の実践を続け

た。毎年入学してくる障害をもつ子どもたちを核に、教科単位の授業はいろいろな形で苦痛を与えることになると提起、以前から体育の授業に関して実践してきたオールラウンドな指導を行う多種目指導を低学年の授業作りに取り入れた。

子どもたちの興味・関心・必要感に根ざした遊びや生活の中の事物や現象を学習対象として、子どもたち自らが主体的に取り組み、連続的・発展的に追求活動できるような総合学習を考えた。いくつかの教科を形式的に統合するのではなく、子どもたちが自らの生活のなかで直面し掘り起こした課題を本気になって追求していく過程では、おのずから教科の枠は越えていくという事実をもとにし、それに最もふさわしい「にんげん」教材「だれのパンか」や「どろあそび」「お手紙」「ぼくらのゆみちゃん」などを軸単元に設定した。

教材化した絵本・紙芝居・パネル・ペープサートなど多様な資料を提示して言葉の壁を超えた学習方法を大切にしてきた。教室が資料館の要素を持ち、子どもたちが興味・関心をもった夫々の課題を連続的・発展的に追及活動ができる場（日本を含むアジア各国の絵本・図書・教科書・写真・文化資料などが自由に利用できる）であってほしいと思ってきた。

1985年度からは学校ぐるみの総合学習を始めたので、これまで一応作っていた隠れ総合学習の時間割表は作成せず教科書を教室の棚に保管、国定教科書やアジアの教科書・他社の教科書も置いた。隣の空き教室も使って平和人権関連の絵本・児童図書や総合学習に必要な多種多様な資料や種々の工作教材などを常備した。その頃から当平和人権子どもセンターの一階資料室のような学校資料室を学年毎に作れたらと思っていた。

子どもたちの意識の流れを大切にされたこの総合学習の教室作りの発想が、私設平和人権子どもセンター作りの理念になり、32年間の隠れ総合学習の実践資料は、現在当センターの1階総合学習コーナーに収納している。毎年公開した授業指導案、総合学習1時間目の問題提起に使用した教材ごとの挿絵や色別短冊カード、子どもの意識の流れに沿って作成した各種プリント類、紙芝居、総合アルバムや総合学習実践記録なども自由に閲覧できるようにした。

学校に1つずつ総合学習に使用する色々な教材や資料、種々の教科書、平和人権関連の絵本・児童図書・パネルなどを開架展示した総合資料室があったらとずっと思ってきた。現在1階の図書資料室・2階の多目的資料室・3階の教科書資料室にある絵本・児童図書

1500冊（教科書に登場する教材、例えば「ひとつの花」と同じような戦時下を主題にした図書百冊など）や日本の国定教科書・アジアの教科書など5900冊も含めて全てが、学校の中にあつたらいいなと思っていた総合資料館になっている。できれば子どもたちが総合学習の追求活動の場の1つとして利用してくれたらと期待している。

5、アジアへの侵略・植民地支配のパネル化・教材化

教科書の墨塗りの後、私が初めて日本の侵略と加害の史実を知ったのは、1970年堺市に復職した直後の同和教育研究会の場だった。それから、解放教育読本「にんげん」を核に総合単元を設定して子どもの意識の流れに沿った平和・人権学習の創造（加害の史実の教材化）と教科書点検を続けた。如何に真実の史実であっても強制的に教えるはいけない。戦時中私が画一的に押し付けられたように伝えるはいけない。「日本はおかしい」と一方的に伝えるのではなく、日々の生活での「何で」という子どもの呟きから私の体験をありのまま語ってきた。

植民地支配の実相も、低学年の総合学習の中で私の就学前や小学校低学年の写真を使って伝えてきた。“40年以上前、先生がみんなと同じ小学校1年の時通っていた日本の植民地だった「満州」の日本人専用の小学校は、新築で全館水洗トイレ・暖房完備、運動場には低学年用・高学年用2つのプールがありました。”などと話すと、その都度いっせいに「そんなはずない」「日本人だけなんで」と抗議の声があがった。1年3学期の総合単元「小さいときのこと」で多様な方法で家族紹介をしていくなかで「先生の子どもの頃の家族」をテーマにした家族新聞で侵略・植民地支配の事実を提示したりした。今、平和人権子どもセンターに掲示・展示してある多種多様な教材用資料も、教室の壁や棚などにさりげなく展示して、しなやかにアジア侵略・植民地支配の問題を提示してきたものが多い。

国民学校4年の時、教科書の模写で余分な×印を加えたため先生から「真面目な顔をしてこんなことをするのは、誰が見ても非国民ですよ」ときつく叱られた「内地の家族」の絵を見せると、子どもたちは「これだけで叱られるなんて信じられへん」と驚きの声をあげた。私の小学校・国民学校時代に使った教科書や絵・作文・写真をはじめ、関連する絵本や児童図書などを可能な限り教室に置いて子どもの意識の流れに沿って適宜提示できるように工夫してきた。それらの資料は、現在平和人権子どもセンター2階の「実物資料

が語る戦争」のコーナーに置き、子どもたちに話に行く時は必ず出前している。

再度の教科書攻撃に際して教科書の墨塗りの裏にあったものを追求し、私が子どもの目から見てもおかしいと思ったことを確かめるためにも、日本が朝鮮や中国などで何をしたのかをアジア各地をたずねて調査研究し、資料収集する営みを始めようと決意した。併せてアジアの教科書や絵本などを購入し、総合学習の資料として常備したいとも思った。まず夏休みの10日間を使って侵略史実調査訪中から始めた。訪中・訪韓などを重ねる度に日本の侵略・植民地支配の傷跡を現地で写した写真を使ってパネル化した。アジアを訪ねる平和の旅はいつのまにか45回を超え、作製した写真パネルは16セット、900枚になった。

16セットの内容は、広島原爆遺跡、長崎原爆遺跡、北海道アイヌモシリ・強制連行跡、沖縄戦跡・軍事基地跡、「満州」（中国東北）侵略の爪跡、「第二の満州」（華北）侵略の爪跡、北朝鮮植民地支配の爪跡、韓国植民地支配の爪跡、ソウル植民地支配の爪跡、濟州島4・3事件と植民地支配の爪跡、台湾2・28事件と植民地支配の爪跡、シンガポール侵略の爪跡、マレーシア侵略の爪跡、香港侵略の爪跡、中国人強制連行跡地、アジアの戦争平和資料館紹介・国内平和人権資料館紹介パネルである。何れも1セット約50枚で、最初は学校の教室のロッカーなどに置いて同和教育実践などの教材として使用していた。現在は平和人権子どもセンター2階の「観光コースにないアジアウォッチングパネル」コーナーに開架展示してあり、次世代に戦争の実態を継承する教材のメインになっている。

アジア各国の教科書の記述に関係するアジアウォッチングパネルの製作は、1982年日本政府がアジア侵略の事実を検定によって歪曲したことに、アジアの国々から一斉に抗議の声があがり、中国の抗日戦争記念館や万人坑遺骨館・韓国の独立記念館・マレーシアやシンガポールの殉難華族追悼碑などの建立に呼応して始めたことになる。「中国侵略歴史パネル」「朝鮮侵略歴史パネル」（現在貸し出し中の3訂版）の原型は、同和教育副読本として教材化（パネル化）した「中国侵略」「朝鮮侵略」の冊子である。

6、平和と人権資料室から堺市立平和と人権資料館へ

「中国侵略」パネルなどを寄贈したことがきっかけとなって、1991年度から5年あまり堺市立平和と人権資料館（1993年度までは堺市平和と人権資料室）に展示担当として嘱託勤務した。授業などに用いた手作り

パネルなどを持ち込み、アジア平和の旅を重ねて現地で入手した資料・証言・写真などを使って加害と被害の両面から戦争の真実を伝えるパネル作りをすすめた。年に4～5回は、自由に日本国内を含むアジア各地をフィールドワークして調査研究・資料収集ができるようになったことが何よりも嬉しいことだった。

1994年にリニューアルオープンした平和と人権資料館の常設展示には「日本の侵略と加害」のコーナーも設立することができた。5年間企画展や特別展に関わりパネル作製を任せられたのもアジア各地への平和の旅で入手した多様な資料があったからだ。新資料館オープン後は「加害を伝えるパネルを貸してほしい」という声が相次ぎ、1995年度1年間でピースおおさかをはじめ地方自治体・学校・市民団体・公的施設など全国95箇所でも中国戦争資料館パネル・東南アジアへの侵略パネル・朝鮮友好と侵略の歴史パネルなどが展示された。

1991年8月の親子平和のつどいで“例え子どもであっても加害者であった私の生い立ち”を語った。それをきっかけに小学校・中学校・高校・大学の歴史学習・平和学習・文化祭や学園祭・職場研修・組合教研などに語り部として出前講話をする機会がふえ、1995年度親子平和のつどいでも「少国民の証言」と題して自分が見てきた戦争体験を再度話した。押し付けでなく、本当のことをありのまま伝えたい思いが適い、戦後50年企画として市民の戦争体験集「語り継ぐ戦争」を被害と加害両面から編集することもできた。

日本の若い世代に、戦時下の暮らしや空襲・原爆など被害の史実だけでなく加害の史実も伝えることが、植民地朝鮮で生まれ「満州」で国民学校時代を過ごした私ができる謝罪の取り組みの1つだと考えてきた。「五族協和・王道楽土」「八紘一宇」「大東亜共栄圏」をたたき込まれ、侵略戦争を「聖戦」と信じて疑わなかったかつての「少国民」の大部分は、未だにその意識を払拭することができない。そこで「少国民」はどうして作られたのか」「何故あのような無謀な戦争を始めたのか」をアジアウォッチングして撮影した写真と教科書を軸にパネル化し、特別展・企画展で直に伝える取り組みを続けた。

「堺大空襲二百人の証言展」「グッドバイロンゲラップ写真展」「近代日本のあゆみをみる教科書今昔展」「私たちが見てきた戦争資料館展」「15年戦争下の堺一記録写真集」「いまま残る朝鮮人強制連行・労働の痕展」「アイヌ民族の文化と人権展」「今、問われるアジア太平洋地域への侵略写真展」「地球環境と人権写真

展「戦争と少国民パネル展」「子どもの人権パネル展」「満州国その光と影展」「近くて遠い隣の国コリア展」「絵で見る子どもの権利条約」「大阪にもあった中国人強制連行展」と続いた自治体立の平和資料館としては、かなり踏み込んだ内容の特別展・企画展は1996年夏でストップした。

7、平和資料館攻撃に抗して

「教科書に真実を」と32年間、検定と闘い続けた家永教科書など平和・人権に関わる数々の運動の成果で侵略と加害の史実が不十分ながら教科書に記載されるようになった。しかし、この戦争の真実が記述された教科書に対して「自由主義史観」研究グループなどを中心に第三次教科書攻撃がすさまじい勢いで広がった。更に教科書攻撃の延長としての平和資料館攻撃が「周辺事態法」「盗聴法」「国民総背番号法」「国旗・国歌法」「教育六法案」と明らかに戦争への道を進みつつある国の政策と呼応して巧妙に続けられた。長崎→ピースおおさか→沖縄→ピースおおさかでの「20世紀最大の嘘南京大虐殺…」集会など一連の資料館攻撃のなか、展示担当として囑託勤務した堺市立平和と人権資料館1996年度夏の特別展「中国人強制連行」にも「右翼」の抗議があった。

展示パネル・貸し出しパネルは、全て東アジア各地をフィールドワークして私が撮影した写真を使用したものだった。ニセ写真など1枚もなかったにもかかわらず、資料館はそれ以来加害の史実を中心にしたパネルの貸し出しをストップ、秋に予定していた「アジアの教科書展」を延期という名目で中止してしまった。11月まで予約が一杯入っていた貸し出しパネルは「平和人権子ども図書室（現平和人権子どもセンターの1階）に返したい。吉岡さんから貸してほしい。」という館長からの要請？の結果、貸し出しパネル26セットは現在当センターの貸し出しセットに入っている。1日にしてその理念を変えてしまった堺市立平和と人権資料館の判断は、まさしく第2の墨ぬりだ。新たな墨ぬりを許さないために平和資料館攻撃に抗してかねてからの念願だった「草の根活動の拠点」私設平和人権子どもセンターを設立することにした。



8、草の根活動の拠点「平和人権子どもセンター」の設立

1997年3月8日に賛同人14人・呼びかけ人94人で発足した平和人権子どもセンターの設立総会には66人が参加。「草の根」創刊号発行時、会員145人でスタートした平和人権子どもセンターは、平和・人権・子どもに関する調査研究と教材化・パネル化などのための資料収集・作製を行い、機関紙などでの情報提供や図書資料・パネルなどの展示、及び貸し出しを通して平和・人権・子どもに関する草の根活動に連帯することを目的に活動を始めた。

設立1年間の来館者は延べ1755人になり、大阪府内以外11県（沖縄・広島・栃木・岡山・奈良・京都・兵庫など）からの来館があった。開館日とした火・水・木曜の午後だけでなく、土・日曜や平日の6時以降に見学や資料・パネル貸し出しの予約が相次ぎ、学校・職場・市民団体の研修などに利用されることが多くなって1人体制のセンターは嬉しい悲鳴をあげることが何度もあった。開館当時の来館者の殆どは小・中・高校の現場の先生だったが、子どもたちの利用も増えてきた。パネル貸し出しは1年間で43件、教科書資料などが60件、出前講話は35回。初年度のパネル製作数は180枚を超えた。

一連の平和資料館攻撃に抗して設立した平和人権子

どもセンターは「窓友新聞」「朝日新聞」「毎日新聞」「週刊金曜日」「沖縄タイムス」をはじめ「大阪教科書ニュース」や「差別とたたかう文化」など各種機関紙に幅広く取りあげられ、NHK・サンテレビなどテレビやラジオで繰り返し紹介されたこともあって設立3年目に入ると来館者は3000人を超えた。特に開館日の火・水・木曜は1人体制の限界を感じる毎日が続き、止む無く全て予約制に切り替えた。その結果、4年目に入って来館者は5000人と伸びは少なくなったが、出前展示・出前講話の件数が急増して利用者が一気に拡大した。和平方人権児童中心という中国語の表示とハングル・英語表示を併記した小さな草の根活動の拠点私設平方人権子どもセンターへの来館者は、設立6年目の秋には延べ9000人を超えた。

1998年11月、ピースおおさかと立命館大学国際平和ミュージアムで開催された世界平和博物館会議の「平和の学習と教育」のセッションでシカゴ平和博物館・プラットフォーム平和博物館と共に「大阪・堺における戦争の歴史を伝える拠点づくり」をテーマに発表を行う機会を得た。奇しくも3つの報告とも「出前展示」を提起することになったことは、その後の私の活動を勇気づけてくれた。日本からの参加者のギャザリングでゆるやかな平和ミュージアム全国ネットワークが結成された。2000年8月の高知県南国市で開催された平和資料館をめぐる諸問題分科会で「当センターの設立に至る経緯」を報告した。2002年8月山梨学院大学で開催された平和ミュージアム分科会でも「次世代への継承の試み」をテーマに報告することができた。また人権展示資料ネットワーク第5回総会でも「私設教科書資料館の資料収集と公開について」の特別報告も行った。

9、国定教科書とアジアの教科書を軸に私設教科書資料館併設

「在満」国民学校で開く前には礼をし汚さないよう破れないよう大切に使った教科書にべったりと墨を塗らされたトラウマは今も消えない。「神国日本」「聖戦」「大東亜共栄圏」「八紘一宇」を信じ込まされた第5期国定教科書の全文暗記した箇所を理由も告げられず塗った体験を「2度と墨ぬりをさせない授業をしたい」という教育実践に繋がりたいと思ってきた。教科書の墨ぬり以上にショックだったのは、墨ぬりの実態が次々に明らかになる中でGHQの命令で行われたと思っていた墨ぬりが実は文部省独自の判断だとわかったことだった。私たちをあの教科書で軍国少女に仕立て上げ

た文部省が、敗戦と同時に変身して米軍が進駐する前に墨ぬりの指示をしたことが許せなかった。この墨塗りの史実を次の世代に墨塗り復刻版教科書を提示して伝えたいとセンター内に教科書資料室を設けた。

しかし、同級生など墨ぬり体験者の意識は私が墨ぬりの疑問を提起しても無関心だったり「日本のよさを消さされて嫌だった」という域を出ることはなかった。教育の成果は恐ろしいもので、皇国史観に基づいたアジアへの蔑視意識を植え付けられたまま歴史に墨ぬりした私たちの世代は未だにその意識を払拭できないでいる。その上、政府官僚はこれまで幾度も歴史の事実「アジアへの侵略と加害」を否定した妄言を重ね、その都度撤回するという失態を繰り返している。アジア各地から歴史の真実を否定し軍事大国になろうとする日本の動きに鋭い目が注がれている。「アジアの国々で働く日本人はその国の歴史や文化を学ぼうとしない。その根底には今なお『大東亜共栄圏』という虚偽のスローガンの下、皇国民の錬成を目的とした国民学校の教科書で教え込まれた『日本は東洋平和のため、アジアの人々を救う戦争をしている。日本はアジアの盟主なのだ』という優越意識が残っている。」という厳しい声に「在満少国民」だった私は、アジア諸国の怒りの声や真の友好交流の活動と連帯してアジア各地を訪ね、侵略史実に関する調査研究やアジアの教科書などの資料収集・歴史文化パネル作製と呼応して教科書の展示を続けなければと思ってきた。

再び教科書の墨塗りを許さないためにも「国定教科書が担った戦争への道」「教科書が伝える戦争」をテーマに平方人権子どもセンター内の3階の教科書資料室には、私が15年間にわたって集めた教科書とアジアを訪ねて集めた教科書約700冊と、戦時下の教科書を複写して作製したパネルを開架展示していた。小さなセンター内の教科書資料室を発展させ、一挙に教科書資料館を併設できることになったのは、1997年11月22日家永教科書裁判訴訟支援大阪地区連所蔵の教科書4000冊余りが寄託されることになったからだ。大阪地区連が20年間運動の中で「教科書資料館を作ろう」と集められた教科書が解散という事情から寄託先として当センターが選ばれたことは私たちの活動が一段と評価されたことになると勇気づけられ、1998年4月1日教科書資料館を併設した。

新たに教科書の歩み14コーナーを設け、3階A室には戦前・戦中の日本の教科書と植民地台湾・朝鮮・「満州」の教科書、3階B室には敗戦直後の日本の教科書とアジアの教科書、2階別室には戦後の歴史教科

書や国語教科書など、1階には最近の教科書コーナーと教科書関連の絵本・児童図書などを何れも分類・開架展示した。壁面などには「日本の教科書の歩みパネル」「戦後の教科書の中の朝鮮・中国パネル」「戦争と少国民教科書パネル」「国定教科書解説パネル」「アジアの教科書パネル」などを開架展示した。2階の研究室兼会議室は、教科書の閲覧・調査や「国定教科書で育てられた少国民が今伝えたいこと」をテーマに教科書を提示しながら来館者と話す場として使用している。

新聞・テレビ・ラジオなどで私設教科書資料館が紹介される度に「戦時のあの教科書を見たい」「懐かしい教科書と出会いたい」「戦後すぐの教科書を調べたい」「満州の教科書は何冊ありますか」「見学に是非いきたい」などの電話やファックス・手紙での問い合わせが相次いだ。大阪府内だけでなく、岡山県・奈良県・京都府・三重県・兵庫県などから日帰りで訪ねてくださる方もあり、半日で25人を超える日が続いて1人体制では到底対応できない状況になった。しかし、「テレビや新聞で見た」と百人を超える方々から励ましの手紙が届き、教科書を送ってくださる方もあり、次の世代に「教科書が語る戦争」を継承するために、教科書貸し出しパネル作製に力を注ぐことにした。

開館日も含めて全予約制にしたことで、大学のゼミ演習・卒論や修論研究、小・中・高校の職員平和人権研修、大学・高校の学園祭や文化祭の打ち合わせなど若い世代に教科書の歴史を伝える機会が増えてきた。各種の市民団体の集会の準備や個人で「戦後の教科書に日本の加害の史実がどう記述されているか調べたい」「朝鮮総督府発行の修身の教科書の内容を確かめたい」「教科書が作った女の規範を戦前の女子修身と戦後の家庭科教科書で探してみたい」「つくる会教科書とそっくりの国定教科書の国史をみたい」「心のノートと修身を比べたい」などそれぞれの課題をもって教科書資料館を訪ねる方が増えて来た。

10、国定教科書で育てられた少国民の私が今、伝えたいこと

堺市立平和と人権資料館戦後50周年企画のパートⅡとして「戦争と少国民展」で当時の少国民の生活を「少国民と国民学校」「少国民と学童疎開」「少国民と空襲」「少国民と大日本青年団」「少国民と銃後」「少国民と学校工場」「少国民と満蒙青少年開拓義勇軍」「少国民と衣服」「少国民と食事」「少国民と遊び」「少国民と絵本」「少国民と紙芝居」「少国民と雑誌」「少国民と

学徒動員」「少国民と学徒出陣」「少国民と少年兵」「少国民と女子挺身隊」「少国民と差別意識」16枚のパネルにした。このパネルを作製した私自身その5年後に国定教科書そっくりの中学校歴史教科書が登場するとは思わなかった。

15年戦争のもと「少国民」と呼ばれた子供たちがいた。戦時下の国民学校に在学した世代（1927年4月～1939年3月）の12年間に生まれた子どもたちである。少国民は国民学校令にもとづき、超国家主義・軍国主義の色彩が全面に出た第5期国定教科書で優れた皇国民に仕立て上げられアジアへの蔑視観を徹底的に植えつけられたのである。国民学校は立派な少国民になるための錬成道場となった。戦争に勝ち抜くために学校の行き帰りまで小さな兵士として「勝ち抜く僕等少国民」の歌を声を揃えて歌いながら登下校させられた。

新しい少国民作りを許してはいけないとかつての「在満少国民」は、2001年「つくる会」が作った教科書と国定教科書を比較検証したパネルを作製した。“戦争への道は知らない間に作られる”戦争賛美の「つくる会」教科書を検定合格させた政府は、教育改革の名のもとに有事法制と連動して着々と「戦争ができる国づくり」を教育現場で進めようとしている。2002年4月事実上の国定教科書道徳副読本「心のノート」が全国の小・中学生に無償配布された。第4期国定教科書修身を彷彿とさせるような内容は、まさに新しい少国民を作る準備だ。“教え子を再び戦場に送るな”という思いを繋ぐために「心のノートと修身」のパネルを作製した。このパネルの内容が少国民だった私の今一番伝えたいことである。

1991年、平和と人権資料室「親子平和のつどい」で“植民地朝鮮で生まれ「満州」で「少国民」に育てあげられた私”と題し私の体験（少国民の証言）を話したことが、その後二百回を超える語り部としての出前講話や来館者への講話の起点になっている。“朝鮮で生まれた私とアイさん、「満州補充読本」と山下先生の総合学習、父の事故死の語るものは、丸暗記した国定教科書の墨塗り”などを核にしてこれからはしなやかに・しつこく私の戦争体験・教科書が語る戦争を伝えていきたい。

11、ピースおおさかでの出前展示

ピースおおさかの特別展示室で市民運動として実行委員会を組織し、初めて出前展示に関わったのは1994年に開催した「七三一部隊展」である。丁度堺市立平和と人権資料館の特別展用に準備した七三一部隊関連パ

ネル（現在改訂版中国侵略歴史パネルの一部）を作製して出前した。1995年にはピースおおさかで開催した「日本の侵略展」「戦後50年いま見つめよう戦争と教科書展」「アジアの子どもたちと戦争展」と敗戦50年企画としての3つの戦争展に関わり、戦時下の教科書パネルなどを出前展示した。

1996年夏まで堺市立平和と人権資料館で企画してきた日本の加害の史実を伝えるパネル展は、それ以後私設平和人権子どもセンター作製のパネルを使ってピースおおさかの特別展示室での企画展示として出前展示を続けた。1996年後半の「中国人強制連行展」、1997年の「毒ガス展」、1998年の「伝えよう沖縄のこころ沖縄展」、1999年は「近代日本の歩みをみるアジアの教科書展」、2000年「アジアの戦争平和博物館紹介パネル展」と何れも堺市立平和と人権資料館で実現できなかった展示内容である。ピースおおさかでの主催・共催の企画展示パネルとして改めて作製したパネル全て現在平和人権子どもセンターの貸し出しパネルになっている。一連の平和博物館攻撃の影響でピースおおさかへの出前展示は2000年度で終わることになる。

12、パネル貸出を通して次世代への継承を

草の根活動の拠点として設立した平和人権子どもセンターは、1997年4月に機関紙「草の根」創刊号を発刊、年3～4回の割合で現在第20号（2003年3月）を準備中である。毎号8ページ仕立ての「草の根」の1ページには「[つくる会]教科書検定合格に抗して急遽《[つくる会]教科書比較検証パネル》作製教科書関連パネル8セットに予約集中～教科書資料館併設3年、平和人権子どもセンター設立4年、まさに草の根活動の拠点～」（「草の根」15号1ページ見出し）など最近の出前展示・出前講話・パネル貸し出し状況・パネル作製の連絡などを記述している。7ページには、観光コースにないアジアウォッチングパネル（毎号6枚ずつ）を連載で紹介している。

また、8ページには平和人権子どもセンターの貸し出しセットの近況を提示している。A4版のウォッチングパネルについては、「5アジアへの侵略・植民地支配のパネル化・教材化」の項で紹介したので、ここではA1版（一部A2版）セット最新情報（「草の根」19号）を記載する。

1. 日本の歩みパネルセット（A2版14枚）、
2. 戦時下の教科書パネルセット（24枚）、
3. 戦争と少国民パネルセット（A2版18枚、A1版9枚）、

4. アジアの教科書パネル（24枚）、
5. 子どもの権利条約大阪弁パネルセット（A2版54枚）、
6. アジアへの侵略パネルセット（18枚）、
7. 中国の戦争資料館紹介パネルセット（27枚）、
8. 中国戦争資料館小パネル、
9. 中国人強制連行パネルセット（24枚）、
10. 中国人強制連行証言パネル（20枚）、
11. 中国侵略歴史パネルセット（24枚）、
12. 沖縄の歴史文化パネルセット（A1版24枚A2版12枚）、
13. 大久野島動員学徒の語り関連パネルセット（A2版23枚）、
14. 日本の平和人権資料館紹介パネルセット（17枚）、
15. 朝鮮人強制連行パネルセット（4枚）、
16. 友好と侵略朝鮮歴史パネルセット（24枚）、
17. 戦後の教科書の中の朝鮮・中国侵略の記述パネルセット（14枚）、
18. 教科書の中「女性差別」の記述パネルセット（8枚）、
19. 教科書が語る「日の丸・君が代」歴史パネルセット（26枚）、
20. 「つくる会」教科書比較検証パネルセット（24枚）、
21. アジアの戦争平和資料館紹介パネルセット（27枚）、
22. 「教科書問題」後の小・中教科書検証パネルセット（24枚）。

現有の当センター作製パネルはA1版とA2版22セット約800枚、A4版は16セット900枚と合わせて1700枚になった。平和人権子どもセンター設立準備期間の1996年後半のパネル貸し出し（前述「7平和博物館攻撃に抗して」）の堺市立平和と人権資料館から引き継いだ分も含め、これまでに貸し出したパネルセット件数は延べ432件約17300枚になる。1997年度は44件、1998年度は73件、1999年度は60件、2000年度は74件、2001年度は141件、2002年度も府内の小学校・中学校・高校・大学の総合学習や平和人権学習などをはじめ、各地の教組・創価学会・愛媛県展示委員会・尼崎公民館・枚方の教育と平和を考える会・清水市歴史を拓く女の会・ユースフォーラム・京都平和友の会・自治労奈良本部・和泉市人権センター・三郷町人権推進課・広範な国民連合・奈良県室生村役場・真宗大谷派青少年部など多岐に亘り、次世代への継承を託した「教科書が語る戦争」を軸にした教科書パネルを中心に貸し出しが続いている。

立命館大学「教科書が語る20世紀展」



【おわりに】《20世紀からの宿題》

20世紀は戦争の世紀であり、人権抑圧の世紀だった。“20世紀の課題は20世紀中に解決しよう”と心ある人々によって様々な検証と努力がなされたにも拘わらず、アジア各地に対する日本の侵略・植民地支配の謝罪も、戦争責任・戦後補償も実現していない。その上、不十分ながらやっと歴史の真実が記述された教科書に対して第3次教科書攻撃がすさまじい勢いで広がり、その延長として平和資料館への攻撃・チェックが明らかに戦争への道を歩みつつある国の政策と呼応して巧妙に続けられている。

“21世紀は平和と人権の世紀に”という願いも空しく、ついに2001年、戦時下の国定教科書国史の復刻版のような「つくる会」歴史教科書が検定合格となり、2002年には第4期国定教科書の修身を彷彿とさせるような道徳副読本「心のノート」が学校現場に無償配布という形で持ち込まれた。戦前の国史・修身の復活に繋がるこの動きは、歴史を歪曲し戦争肯定の歴史認識の形成を図り、心理学の手法を駆使して国家への忠誠心＝愛国心刷り込もうとするまさに第2の墨塗り、新しい「少国民」を作るための準備である。

私は32年間勤務した小学校で、子どもの目から見てもおかしいと思った植民地支配の実相や現地調査した史実を総合学習の中で教材化したり、非国民と叱られた国民学校4年の時に描いた絵を提示したり、丸暗記した6年の国史・地理・修身・国語の墨塗りについて語ったりしてきた。如何に歴史の真実であっても強制的に教えるはいけない、戦時中私たちが画一的に押し付けられたように伝えるはいけないと思ってきた。この実践の原点になったのは「在満」小学校1年担任の山下先生の総合学習だった。

植民地朝鮮で生まれた私が総督府官舎で聞いた「ここは私の家だった」という朝鮮人少女アイさんの眩

が、私設「平和人権子どもセンター」設立の原点になった。そして、敗戦直後「間違ったところを消す」という教師の指示でさせられた教科書の墨塗りが「教科書資料館」併設の原点になった。手のひらを返すように豹変する教師に戸惑い「絶対に小学校の先生になって楽しかった山下先生のように教科書を使わない授業をしたい、2度と子どもたちに墨塗りをさせたくない」と決意した。この時から私は生涯をかけた宿題をアイさんや山下先生から託されたと思っている。隠れ総合学習から私設平和人権子どもセンター設立へと移行する過程でその思いは一段と強くなった。

宿題とは、小学館発行「学習漢字辞典」によると“①うちで勉強するように学校から出された課題、②いつか解決しなければならないこととして残された問題”となっている。②の用例として“「どうしたら戦争をなくすることができるか」というのが人類の宿題だ”と記されている。何れにしても宿題は自分で解決しなければならない長期にわたるいくつかの課題だと言える。私の20世紀からの宿題も、そのまま21世紀に残されたことになる。私の20世紀からの宿題の提出先は、次世代の子どもたちである。すでに20世紀に提示した「総合学習の中の平和学習」「アジアへの侵略・植民地支配の歴史パネル化・教材化」「平和人権子どもセンター・教科書資料館設立」「子どもであっても加害者だったという少国民としての証言」なども21世紀につながなければならない。

「少国民の証言」「朝鮮で生まれ、在満少国民に仕立てあげられた私が今伝えたいこと」「戦争のない21世紀を子どもたちに」「教科書が伝える戦争」などをテーマに続けてきた出前講話はこの12年間で200回を超えた。それらの出前講話などで話してきた私の体験や実践をまとめて解放出版社から『「在満少国民」の20世紀』というタイトル、「平和と人権の語り部として」というサブタイトルで念願の出版をすることができた。目次には“20世紀からの宿題 まえがきにかえて”“第1章 植民地・朝鮮で生まれた私”“第2章 隠れ総合学習から「にんげん」を軸にした総合学習”“第3章 語り部として「草の根活動」の拠点”“キーワードは「平和・人権・総合学習 あとがきにかえて”と記し、「20世紀からの宿題」として次世代に継承したい内容を1冊の本にした。

“20世紀からの宿題「平和・人権の思いを刻んだ総合学習」を軸にして”『「在満少国民」の20世紀』を出版して4か月余り、“「在満少国民の20世紀」「在満少国民が今伝えたいこと」と題して体験を話してほしい”

という予約が相次いでいる。前述のパネル貸し出し同様、府内・府外の小学校・中学校・高校・大学をはじめ行政・府立外教・各種市民団体などから出前講話・来館講話の要請が続き、私の20世紀からの宿題“若い世代に私の少国民体験を伝える”営みを応援してくれている。



また、このように次世代に戦争の歴史を継承することを目的に設立された平和人権資料館が、アジアには数多くあることを伝えるために、この20年余り「観光コースにないアジアウォッチングパネル」作製の中で作ってきたアジアの平和人権資料館紹介パネルに2001年・2002年集中的に国内平和人権資料館（人権ミュージアムネット・平和ミュージアムネット・泉州ミュージアムネットのリストを参考に）を訪ねて作製した「国内平和人権資料館紹介パネル」を合わせて今年「東アジア平和人権資料館紹介パネルセット」を貸し出しセットに入れた。そして、今年度は3度、行政立・財団立・当資料館のような私設資料館など多種多様な平和人権資料館があることを伝えるために、200枚の資料館紹介パネルを展示して企画展を催した。このようなパネル作り、出前展示や出前講話をこれからも続けていきたい。

（筆者 平和人権子どもセンター・教科書資料館館長）